

群 教 セ	E03 - 03
	平14.210集

地域社会とのかかわりをはぐくむ 「総合的な学習の時間」の実践 ——知的障害のある生徒に ボランティア体験活動を取り入れて——

特別研修員 阿部 古津栄

《研究の概要》

本研究は、知的障害養護学校高等部の生徒に、総合的な学習の時間において、学校周辺の地域社会の人に「喜んでもらえる活動」であるボランティア体験活動を取り入れることにより、自己肯定感を高め、人とのかかわりを広げることをねらいとしたものである。実態が異なる2人を研究対象とし、個々の特性等に応じた支援の工夫をした。その結果、活動への見通しや期待感が生まれ、人とのかかわりに積極性が見られるようになってきた。
【キーワード：知的障害 高等部 総合的な学習の時間 ボランティア体験活動】

I 主題設定の理由

1 新学習指導要領の実施

養護学校高等部において、平成15年度から学年進行により実施される新学習指導要領で、新たに設けられた「総合的な学習の時間」は、生徒が各教科で身につけた知識や技能を相互に関連づけ、総合的に学習に活かしながら、自己の生き方を考え、生きる力を育成することを目指す。

また、『盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領解説—総則等編—』第2節「就業やボランティアにかかわる体験的な学習の指導」に、「学校においては、生徒の障害の状態、地域や学校の実態等に応じて、就業やボランティアにかかわる体験的な学習の指導を適切に行うようにし…」とある。従前の「勤労や奉仕にかかわる体験的な学習の指導」が「就業やボランティアにかかわる体験的な学習の指導」に改められ、それらを通じて「勤労の尊さ」「創造することの喜び」の体得、「望ましい勤労観、職業観」の育成、「社会奉仕の精神」の涵養を図るべきであることを示している。

このような体験的な学習は、社会への旅立ちを目前にしている生徒にとって、自分以外の他者の存在や、自分と社会とのかかわりの意識を深める上でも重要であると考えられる。

2 生徒の実態

保護者の連絡帳や生徒の話から、休日や放課後の過ごし方の様子は、家でテレビやビデオを見たり、保護者と一緒に買い物をしたりすることが多いようである。生活圏が限られており、社会経験が乏しい印象を受ける。

一方、学校周辺の地域社会の人とのかかわりは、学習活動の中で年に数回あるくらいで少ない。具体的には、2年生のときに、近隣の老人ホームに出掛けたり、来て頂いたりして2回の交流を行った。また、毎年、文化祭で「学校開放講座」に参加している方と、企画を一緒にやっている。これらは、学校全体または学年単位で行い、時間も1時間程度である。クラス単位では、近くのコンビニエンスストアに弁当を買いに行く活動を行っている。

重複障害クラスの生徒は卒業後の進路として、作業所への通所を希望している。来春になると、また新しい場所で、新しい人たちの中での生活が始まる。社会の入口に立とうとしている今、家庭や学校などの自分が生活している空間から離れ、少しでも社会で活動している人と接する機会を増やすことは、卒業後の生活にスムーズに適応できるようになることにつながり、本校の教育方針にある「地域との触れ合いを通じて生活範囲の拡充を図る」ねらいにも通じるものとする。

II 研究のねらい

生活経験や社会性が乏しい生徒に、「人に喜んでもらえる」というボランティア体験活動を通して、地域社会とのかかわりをはぐくむようにするためには、「総合的な学習の時間」の指導において、どのように活動内容や支援を工夫したらよいかを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

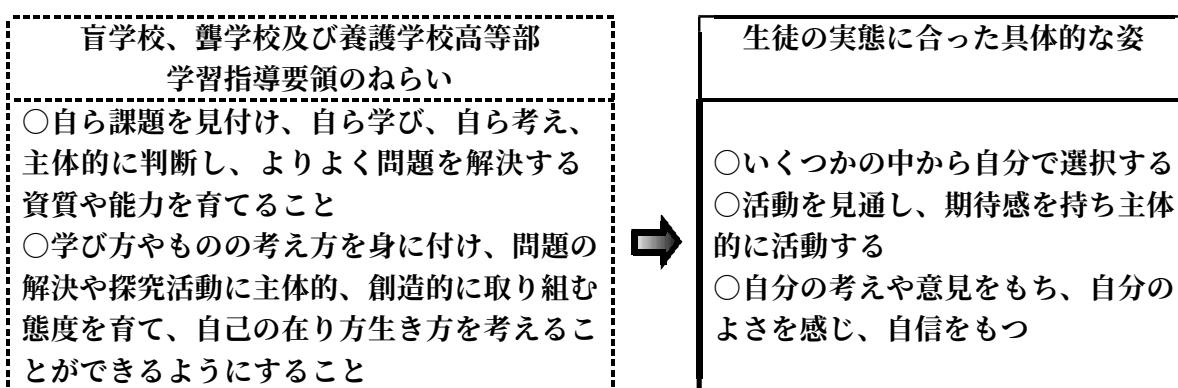
生徒にとって身近で、お世話になることがある学校周辺地域で生活する人たちに、どのようにしたら喜んでもらえるか、総合的な学習の時間において、ボランティア体験活動の活動内容や支援を工夫することによって、生徒は地域社会の存在に目を向け、自分からかかわろうとすることができるようになるであろう。

IV 研究の内容

1 研究における基本的な考え方

(1) 重複障害のある生徒にとっての「総合的な学習の時間」について

『盲学校、聾学校及び養護学校高等部学習指導要領』第1章第3款第2にある「総合的な学習の時間」のねらいは以下のとおりである。このねらいに迫るために、生徒の実態から導き出した具体的な姿を次のように考えた。



(2) ボランティア体験活動について

ボランティアはラテン語の *vol* という言葉に由来し、「自発的に自らの意思をもって行動する」「喜んで人のために何かをする」という意味をもつ。しかし、重複障害クラスの生徒たちは、自分のことだけで精一杯な状況があり、これまで人から世話をしてもらった経験が多いため、人に何かをしてやるという意識は薄い。つまり、「喜んで人のために何かをする」こ

と、「自分から進んで」することには、教師の支援が多く必要である。

そこで、この研究では「ボランティア体験活動」を、自分たちがお世話になっている人に、手作りのものをプレゼントして、喜んでもらえる活動することとした。そして、個に応じた支援を行いながら活動を繰り返すことにより、人に喜んでもらえることを実感できるようにし、自分から少しでもかかわりをもてるようにしていく。そのなかで、自己肯定感が高まり、自分に自信をもつことにつなげていきたい。自信がもてると、人とのかかわりにも積極性が出てくると考える。

(3) 地域社会とのかかわりについて

人は誰もいろいろな人に支えられて生活している。生徒にとって、家庭が一番身近な社会であり、次に学校が挙げられる。高等部での生活も3年目になり、どんな先生がいるのか分かれ、担任以外の先生とのかかわりも深まってきている。学校の中で、できるようになった人とのかかわりを、地域社会に広げていきたいと考えた。ここで挙げる「地域社会」とは、学校周辺の地域社会であり、そこで営んでいる人を対象とする。学校周辺の地域社会には、生徒がこれまでの学習活動の中で利用し、馴染み深い場所があるからである。

2 研究の内容

(1) 重複障害クラスでのボランティア体験活動

生徒は、1年生のときから、買い物学習の一環で近くのコンビニエンスストア（以下、「コンビニ」と記す）を利用している。コンビニは生徒にとって見通しが持ちやすい場、そして地域の中でも無理なく入っていける場である。また、自分で作ったものを人にプレゼントする活動は、製作段階から生徒がかかわり「人にプレゼントしよう」という意識を高められる。それが、自分でプレゼントを渡すという自主性につながり、「自分が行動したことで、相手が喜んでいいる」と感じられる。「人に喜んでもらえる自分」を感じることが、自己肯定感であると考ええる。

ア 単元「コンビニエンスストアの人にプレゼントしよう」の実践

(7) 対象生徒の実態

4名の生徒（男子2名、女子2名）が在籍する重複障害クラスで、その中の女子2名（A女、B女）を研究対象とする。A女は、簡単な会話ができる。B女は、挨拶や頼み事をするとき、頭を下げて、「あいお」「あん」など母音に近い音を発する。

(4) 単元の目標

- <全体> ○ お弁当を買いに行っているコンビニの人に、自分たちが作ったものをプレゼントする見通しをもち、進んで活動できる。
- 手作りのものをプレゼントすることで、進んで地域の人とかわることができ

<個別>

- A女 ○ コンビニの人に喜んでもらうことを意識して、プレゼントを作ることができる。
- 渡す人の方に体を向け、プレゼントを渡すことができる。
- コンビニの人と会話を交わすことができる。
- B女 ○ コンビニの人にプレゼントを渡すことが分かって、教師と一緒にプレゼントを作ることができる。
- 頭を下げながら、プレゼントを渡すことができる。

(9) 指導方針

- 活動を振り返ることができるよう、生徒が分かりやすい写真・ビデオ等、視覚に訴える教材を繰り返し用いる。

- どんなものをプレゼントしたら喜んでもらえるか、生徒にヒントを与えながら、教師と一緒に考えるようにする。
- 活動への意欲を引き出すために、良くできたところに焦点をあて、肯定的な言葉掛けを多くする。
- コンビニの人にプレゼントするものであることを意識できるように、製作の過程でも随時言葉をかける。
- プレゼントをもらって相手が喜んでいいるという気持ちを感じられるように、コンビニの人に授業の趣旨を理解してもらい、生徒がプレゼントした後に言葉を掛けてもらうように依頼する。
- 何をプレゼントするか考え、製作し、プレゼントに行くという活動を発展的に繰り返すことにより、ねらいに迫れるようにする。

(エ) 指導計画 (全 26 時間計画)

	段階	主な学習活動	時間	支 援	評価項目(評価の方法)
第一次は省略する					
第 二 次	考 える ・ 製 作 す る	○コンビニに今度は、何を作りプレゼントするかを考える。 ○プレゼントするものを製作する。 ○飾ってもらう場所を考える。	4	○もうすぐクリスマスが近いことを話し、店に飾ってもらえるものを作ったかどうかと提案する。 ○コンビニの人にプレゼントすることを話しながら一緒に製作する。 ○どこに飾ってもらうか考えるために、一緒にコンビニに行く。	○何をプレゼントしようか考えている。 (発表・観察) ○教師と一緒にプレゼントを作ろうとしている。 (行動観察・VTR)
	体 験 す る ・ 振 り 返 る	○コンビニに自分たちで作ったプレゼントを届けに行く。 ○行った様子をも一度、ビデオで見て、振り返る。	2 授 業 研 究	○素敵なプレゼントをもらったら、店員さんは喜ぶことを話し、活動への期待感を高める。 ○どのように渡すか、練習する機会を設け、具体的な動作を通して考えられるようにする。 ○前回のときよりも良くできたところを、具体的に伝え、次回への意欲付けとする。	○プレゼントを自分一人で渡そうとしている。 ○店の人の質問に答えている。 (行動観察・VTR) ○プレゼントを渡したときの様子を興味を持って見ている。 (行動観察・VTR)
第三次は、第二次と同様に進める					
第 四	ま と め る ・	○今までの活動をまとめる。 ○自分たちのした活動を他のグルー	6	○活動を振り返るために、プレゼントのときの映像を見たり、自分の写真をアルバムに貼っていくようにする。 ○発表するために、大きくした活動場面の写真を順番に模	○写真をアルバムに進んで貼っている。 (行動観察) ○コメントを考えている。

次	発表する	プの人に発表する。	造紙に貼り、コメントを一緒に考える。 ○発表したいという気持ちを高めるために、発表の練習をする。	(行動観察) ○進んで発表しようとしている。 (行動観察)
---	------	-----------	---	-------------------------------------

V 実践の概要

1 第一次（ 9／3～10／21、ふきんをプレゼントする ）

< A女について >

何をプレゼントしようかという問いかけに、答えはなかったので、家庭科で調理の時に使っているふきんを作ったらどうかと提案する。ふきんの製作については、縫い糸の色も自分で決め、意欲的であった。

渡す練習のときは、普段一緒にいる担任の男の先生が店員の代わりをした。横を向きながら片手で手渡していたので、前を向いて両手で渡すともらった方は嬉しいことを話した。

店員に渡すとき、なかなか前を向けず、プレゼントを渡せなかった。隣で教師が渡し方の手本を示すと、差し出すことができた。活動を振り返る場面では、2、3回と繰り返し見て、教師が「上手に渡せたね」と声を掛けると、自分が渡した喜びに笑顔が見られた。

< B女について >

ふきんの製作では、教師とともにゆっくりではあるが、縫い進めていた。渡す練習の時は、好きな先生だったせいもあるのか、満面の笑顔で喜んで手渡していた。



渡しに行くとき、歩行の邪魔になるかと思い、プレゼントは教師が持ったが、教師の手からプレゼントを取った。練習のときのような笑顔は見られなかったが、うつむき加減に声を出しながら渡せた。

映像を見て活動を振り返る場面で、「これはB女さんだよ。上手に渡せたね」と言うと、テレビに映る自分を指さしていた。

○ 第二次に向けての改善点

- ・プレゼントをラッピングする活動を入れ、期待感を高める。
- ・渡す練習のとき、普段あまり面識のない先生に店員役をお願いする。その際にも、A女には、簡単な会話をする機会を設ける。

2 第二次（ 11／11～11／25 クリスマスツリーをプレゼントする）

(1) 学習指導案（ 別添資料1 ）

(2) 実践の結果

< A女について >

今度は何を作ろうかと投げかけると、A女は「雑巾」と答えた。「違うものを作ろう」と言うと、しばらく考えていたが、答えはなかった。来月は、クリスマスがあることを話し、まっぼっくりのクリスマスツリーを提示しながら、「これを作ろう」と話すとA女はうなずいた。

まっぼっくりのクリスマスツリーを作る活動では、A女は大変意欲的で、「これ誰にあげるのですか」と聞くとコンビニの名前をすぐ答えた。

今回、渡す練習のとき、普段ほとんど面識のない先生をお願いした。緊張した様子で「飾っ

てください」と言いながら渡した。

本時のねらいとして、「コンビニの人の質問に答える」をあげた。事前にプレゼントをどこに飾ってもらうか、教師と下見に行き、場所を決めてあったが、店員の問いかけに、教師がすぐ援助してしまった。「ここでいいですか」という店員の問いかけに「いいです」と小さい声ではあるが答えられた。

渡した帰り道「飾ってあるのを見に行こうね」と言うと、うなずいていた。ビデオやテレビはあまり集中して見ることはないA女であったが、映像を見て振り返る場面では、一番前で腕を組み、真剣に見ていた。友達が、映像を見ながら「ツリー、きれい」と言うと、「うん」とうなずき「きれいだね」とつぶやいていた。

＜ B女について ＞

今回作るものを提案し、まっぼくりのクリスマスツリーを提示する。「これを作ろう」と話し、目の前に置くと、見ていた。「今日の総合活動は何をするか」という質問から、ふきんとツリーのどちらかを選ぶ活動は、分かりにくいものであった。そのため、近くにあるふきんを取ったと思われ、不適切な支援であった。ツリーを目の前に提示し、「『どうぞ』をしにいこうね。」と渡すポーズを取ってみたい。

製作は、教師の促しで進んだ。声掛けの支援がなくなると、活動が止まるときがあった。

その後、ラッピングや渡す練習など、友達のする様子を見て状況を理解し、同じように活動したものと思われる。

渡す練習のときも本番も、いつもの笑顔がこぼれ、緊張することなく渡せた。ツリーを飾っているときも、店員の様子やそれを見ている友達をよく見ていた。

渡した帰り道「飾ってあるのを見に行こうね」と言うと、こっくりとうなずいた。学校に帰り、映像を見ているとき、B女が渡し終えた場面で、渡しに行けなかった友達が、活動をねぎらうがごとく、声を出した。「〇〇君がよくできたって言っているんだよ」と言うと、その友達の顔を笑顔で見ている。その後、繰り返される映像をよく見ていた。

○ 第三次に向けての改善点

- ・渡すという期待感をより高めるために、ラッピングのリボンと袋を製作する活動を加える。
- ・A女には店員に渡す際に言う言葉を一緒に考え、言葉を添えながら渡すようにする。その際に「何を入れて使ってほしいですか」と店員に聞いてもらうようにしたい。
- ・B女には、渡した後言葉を掛けてもらい、握手を店員に求めてもらうようにする。握手によるコミュニケーションを取らせ、かかわりを深めたい。

(3) 授業研究の評価（別添資料2）

3 第三次（11/26～12/5、12/12 ペン立てをプレゼントする）

＜ A女について ＞

何をプレゼントしたいかとの問いかけに、考えている様子であった。「美術の時間にしている皮をトントンするもの、ペン立てではどうですか」と言い、実物を見せるとうなずいた。



ツリーを飾っている様子

製作に意欲的で、教師が塗り残しを支援しているのをじっと見ていた。製作が一段落して、乾かしていると、「これ作らないですか。」と言いに来た。「早く持って行きたいの」と聞くと、うなずいた。

自分から進んでやりたいと活動を選び、普段面識のない木工担当の教師と作業室に、使う道具を取りに行ったり返したりできた。2枚の皮を貼り合わせ、1つのペン立てにした。2人1組で活動し、2つのペン立てを製作した。

今回、最後のプレゼントはB女と渡した。渡した後、店員の質問に何度もうなずいていた。言葉はなかった。最後に照れながらも、手を出し握手をした。



レーザークラフトのペン立て

< B女について >

今度作るものについての質問には、表情を変えなかった。ペン立てを提案し、そばで「今度はこちらを作ろう」と話すとうなずいた。製作の様子は、A女の様子を見ながら、製作を自分で進めていた。

「リボン」と「袋」を提示し、どちらが作りたいか聞くと、利き手の近くのリボンを取った。並べ替えて提示しても、リボンを取った。もう一人のリボン作りの友達と教師と一緒に楽しそうに製作していた。上手にテープが貼れると、3人で親指と親指を合わせ「よくできたね」のボディランゲージをしていた。

渡すときの様子は、笑顔で会釈をしながら、A女と渡せた。握手の時、今までにない笑みがこぼれ、進んで手を差し出し、力強く握手をしていた。

4 第四次（12/9～12/20 活動のまとめ・発表）

発表用の資料は、1回のプレゼントまでの活動を模造紙1枚にまとめ、合計3枚の資料を作った。個人のアルバムには、今までの活動写真を順番に3回に分けて整理した。

< A女について >

拡大した活動写真を進んで貼り付けたり、写真にコメントを考えて書いたりした。

アルバムの整理でも、「クリスマスツリーを渡したときの写真はどれですか」と聞くと、喜んで写真を差し出した。

発表時の様子は、緊張した様子で発表資料を持ち、うつむいたままであった。教師が後ろで発表の言葉をつぶやきながら支援すると、言葉が出てきた。発表が終わり、最後の礼のとき、笑顔がこぼれ嬉しそうだった。

< B女について >

発表時の様子は、発表資料をしっかりと握り、下を向いていた。友達が発表しているときも、下を向いたままであった。教師が「B女さんは、今は下を向いていますけれど、プレゼントを渡すときは笑顔でとても上手に渡せたのですよ」と皆の前で言っても、表情は変わらず、緊張した様子であった。



Ⅵ 実践の結果と考察

○ A女・B女の目標に対する結果とその考察を、以下にまとめる。

	目 標	結 果 と 考 察
A 女	○コンビニの人に喜んでもらうことを意識して、プレゼントを作ることができる。	実際に作ったものを渡す経験をしたり、店員に声を掛けてもらったりすることで、意識が高まっていった。また、プレゼントを実際に飾ってくれたのが嬉しかったようで、最後のペン立て作りでは、早く作りプレゼントしたい様子が見えた。
	○渡す人の方に体を向け、プレゼントを渡すことができる。	初めは、なかなか前を向けなかったもので、隣で教師が渡すポーズを取ると、渡すことができた。うつむきがちであったが、回を重ねるうちに言葉を添えながら渡せるようになった。
	○コンビニの人と会話を交わすことができる。	「会話を交わす」まではいかず、返事をするだけで精一杯であった。店員さんの質問にA女が表情を変えなかったため、すぐに教師が援助してしまった。店員さんの言葉掛けの後、もう少し待ったら、会話のやりとりがなされたかもしれない。
	○コンビニの人にプレゼントを渡すことが分かって、教師と一緒に作ることができる。	教師と一緒に作ることができたが、コンビニの人に渡すと理解できたのは、プレゼントをラッピングし、プレゼントに行くために外に出る頃からだと思われる。作るという行為が、プレゼントをすることにつながることを理解するのは難しかった。
B 女	○頭を下げながら、プレゼントを渡すことができる。	回を重ねるにつれて、リラックスした表情で渡すことができた。

VI 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

○ 地域の人とかかわりについて

自分がしたことで、相手が喜んでくれたという経験によって生徒の中に自信がはぐくまれ、人とかかわりに積極性が出て、生徒の世界が広がることを今回の研究で願った。「相手が喜ぶ」手段として、手作りのものをプレゼントするというボランティア体験活動を同じコンビニで3回行った。1回目のプレゼントのときは緊張した様子であり、支援も多く必要であったが、3回目は自分で渡そうという意思が感じられ、進んでコンビニの人とかかわれたと感じた。また、何よりも生徒は、この活動に期待感をもち、進んで活動している姿が多く見られたり、活動後もコンビニに行くことを楽しみにするようになったりした。店員も生徒に気軽に声を掛けてくれるようになった。活動を始める前には見られなかった親しみが、生徒にも店員にも生まれたのではないと思う。生徒の活動の原動力となったのは、店員が喜んでくれたこと、自分が作ったものが役に立っているという実感であり、自己肯定感の高まりであったのではないと思う。

○ 活動内容や支援の工夫について

- ・1回目はふきん、2回目はまつぼっくりのクリスマスツリー、3回目はレザークラフトのペン立てを作りプレゼントした。これらは、生徒が作業学習や美術で経験のある活動を生かしてできるものであったり、季節感があったりしたので、興味を持って取り組みやすかった。
- ・同じような活動を繰り返したことにより、プレゼントを作り、渡しに行くことが見通せ、進

んで店員とかかわりが持てるようになった。

・活動場面の写真を大きくして提示したことや活動の映像を繰り返して3，4回提示したことは、自分のしてきた活動を具体的に思い出すのに有効であった。

・何を作るかと考える活動の支援が上手くできなかった。作った経験のあるものやプレゼントするにふさわしいものをいくつか提示して、生徒が選ぶといった支援の工夫が必要であった。

2 今後の課題

○ 抽出生徒の課題

< A女について >

実践を繰り返すことにより、見通しがもてたり、やっていることの意味が理解でき、自信が生まれた。かかわりへの自信をもてるように、校内では、お使いに出す機会を多く設け、校外については、築いた関係を深められるよう、コンビニに出掛けていき、生徒と店員のかかわりを見守りたい。

< B女について >

見通しのもちづらい状況のときに、友達の動きをマネする機会が多いことが分かった。日常にないことは、個別に言葉をかけられても難しい様子であった。実際の体験活動や写真、具体物を提示しながら、活動を繰り返していくことが大切である。「していることの意味」を理解できると、B子の活動に見通しが生まれ、進んで活動できる場が増えるので、その方法をこれからも模索していきたい。

○ 「総合的な学習の時間」の進め方・ねらい

週1回1時間で学習したが、次の時間までに間があいてしまい、学習内容を思い出すのに時間を必要とした。また、活動の準備・後かたづけにも時間がかかるので、学習時間のまとめ取りが望ましい。

重複障害クラスの生徒にとっての「総合的な学習の時間」をどう進めていったらよいか、これからも研究を続け、共通理解して授業に臨んでいきたい。

<主な引用・参考文献>

・群馬県県民生活課編集、発行

『みつけよう！わたしのボランティア 踏みだそう！はじめの一步』（2001）

・文部省『盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領（解説—総則等編—）』（1999）

・朝倉教子 長期研修員研修報告書第199集 群馬県総合教育センター（2001）

・群馬県教育研究所連盟編著 『改訂新版 実践的研究の進め方』東洋館出版社（2001）

・宮城教育大学附属養護学校ITP研究会 著 清水貞夫監修 三浦光哉編著

『障害児教育の「総合的な学習の時間」

～生活単元学習から「総合的な学習の時間」への転換～』田研出版（2001）